

打って反省、打たれて感謝

古川学園高等学校 一年 吉岡 甫

剣道では「打って反省、打たれて感謝」という言葉があります。「打って反省」とは、正しい心で無駄なく打ち込めたか常に反省することです。「打たれて感謝」とは、打たれることで自分の隙を教えてくれた相手に感謝することです。あの坂本竜馬も、千葉道場でこの言葉から、打たれて挫折から這い上がるには感謝が大切であり、打っておごることなく謙虚でいることを学んでいます。

私は中学校の三年間、部活動で剣道部に所属していました。中学校に入学し、剣道は初めてのスポーツで、とにかく試合に勝つことを最優先にしていました。打つことだけを考え、一本を取ることができれば満足していました。逆に打たれると悔しい気持ちになり、強くなりたいと思うだけでした。当時は勝りたい、勝りたいという気持ちが先走り、正々堂々とした試合ができなかったように思います。

中学二年生の秋に、県内の中学校が多数集まる練習試合がありました。練習終了後に、主催していた中学校の顧問の先生から、剣道の心構えについて教わりました。剣道とは、礼に始まり、礼に終わります。単なるスポーツではなく精神の修養、すなわち心の修行が重点に置かれているとのことでした。その中で「打って反省、打たれて感謝」という言葉について説明がありました。私はその意味を知り深く感銘を受けたことを覚えています。私はこの言葉を聞いて、剣道とはただ試合に勝てばよいという訳ではないと知りました。そして、心を穏やかにし、相手を敬う気持ちを持つことにより初めて試合に臨めるということに気付かされました。その日を機に、剣道に対する意識を変えるようにしました。打ち込んで一本を取ることができたときでも、もっと正しい心で無駄のない打ち込みができないか、常に心懸けました。また、打ち込まれたときは相手に自分の隙を教えてくれたことに感謝し、改善できる方法がないか考えました。そして指導していただいた先生や先輩方のアドバイスを素直に受け入れ、練習に取り込むよう励みました。友人とも、どこに問題があるか、弱点を克服するにはどうすればよいかなどと話し合いました。その結果、友人との練習においても、ただ打ち込むだけではない、お互いに切磋琢磨する練習ができました。剣道部の部長達と心を一つにし、試合や練習に取り組めたことは私にとって大切な思い出です。そうしたことから、次第に勝ちたい、勝ちたいという気持ちが和らぎました。そして、日々の練習に無心で取り組めるようになった気がします。剣道を始めた頃私は負けてばかりいました。しかし、最後の中総体では一本を取って勝つことができました。試合に勝つことは、己に勝ち、心を無にして打ち込むことが大切だと学びました。この精神を通じて、両親や学校の先生方にしかられたときも、素直に反省し、しかってくれてありがたうという感謝の気持ちを持てるように努力しました。

私は剣道を辞めた今でも「打って反省、打たれて感謝」の言葉を大切にしています。この短い言葉は何事にも通じる言葉であり、様々な教訓が詰め込まれています。多くの人々の役に立てるような感謝の気持ちをいつも忘れないこと、おごることなく謙虚であること、礼儀を大切にすることなどいろいろな意味が込められています。実行することは難しいけれども、成功した時も失敗した時も、この言葉を忘れないようにした

いと思います。

私は失敗した時など、反省することはあります。しかし、感謝の気持ちを忘れがちで、両親や先生方からのアドバイスに対して耳を傾けない時がよくあります。そんな時、初心に帰り、「打って反省、打たれて感謝」を思い出し、唱えたいと思います。これから生きていく上で、様々な問題に直面します。そういう時は、この言葉を思い出して頑張ろうと思います。また苦しい時とは反対に、良かった時、成功した時は謙虚な気持ちを大切にしたいと思います。おごらずに、自分だけの力で成功したのではなく、周りの多くの人々が支えてくれたおかげであることに感謝し、人のためになれるような人間に私はなりたいです。そのために、多くの人に支えられていることに感謝し、一日を満足できるように過ごし、それを積み重ねて日々努力していきたいと思っています。